



テロをなくす



m o r i 3 5 8 0

戦争は怖い！ を電子書籍で発表して以来1年になるが、安倍内閣は戦争のできる国へと加速させているという印象である。

テロはますます広範囲となり、日本人もその被害を受けるに至った。自爆テロはなぜ起きるのか、テロをなくすにはどうしたらよいかを、私の経験に照らして考えてみたい。

私は軍事教育と民主教育の両方を受けて育った。両方を体験してみて、民主主義教育の方が人間を幸せにすると確信している。軍国主義教育は「国のために死ぬ」ことを教える。私は子供のころ、近くにあった「爆弾三勇士」の銅像の上に乗って遊び、大人に叱られたことがある。「爆弾三勇士」は長い爆弾を3人で小脇に抱えて敵陣に突っ込んだ兵士たちの像である。自爆攻撃は旧日本軍もやっていたことである。太平洋戦争末期の「神風特攻隊」は国家ぐるみで組織的に行われた自爆攻撃であった。

教育の怖さを今では痛感している。軍国主義教育を受けていると、それが当たり前のように becoming。日本は神の国だから、最後には神風が吹いて戦争に勝てると信じ込まされていたのである。

自爆テロの実行者はどういう教育を受けていたのだろうか。私は中学2年の敗戦まで受けた軍国主義教育を信じ込んでいた。その後民主主義の教育を受けて、軍事教育は人を不幸せにし、国を亡ぼすことを知った。

自爆テロは宗教の問題であるともいわれる。イスラム教シーア派とスンニ派との主導権争いの要素もあるといわれる。それぞれの派に国がついており、国境を接している場合もあるので、いっそう複雑になっている。

経済格差と貧困が、自爆テロの原因のひとつという意見もある。人間が生きてゆくのもっとも基本的な衣食住に不自由して、将来に希望がもてなければ、自暴自棄になりやすい。現状に激しい不満があれば、他の誘いに乗りやすい。経済格差と貧困は自爆テロを生みやすい。

私は教育の専門家でもなく、宗教についてもほとんど知らない。もちろん経済の専門家でもない。しかし、前作の「戦争は怖い！」を書くときに憲法について学びなおしたが、専門家でなくても、自分の意見や考えを自由に発表することが民主主義の基本であることを知った。「表現の自由」は「基本的人権」の重要な一部であり、民主主義の根底にしっかりと根を張っていなければならない。

専門家・研究者でないから、記憶違いや知識不足があるかもしれないが、ご指摘下されば、謙虚に受け止めるつもりである。また異論・反論も歓迎するのが民主主義である

。要は、自爆テロをなくすための議論のきっかけになれば幸いと思っている。

### #爆弾三勇士（ばくだんさんゆうし）

1932年（昭和7年）2月22日中国上海の戦闘で、3人の工兵が鉄条網爆破のため爆薬を装填した破壊筒を抱えて突入、生還に失敗し爆死した。陸軍はこれを覚悟の自爆とし、3勇士として顕彰する方針をとった。新聞は爆弾三勇士の美談をセンセーショナルに報道し、ラジオ・映画・演劇をはじめ、各種メディアや芸能・興業界は三勇士もの一色となった。1942年発行の初等国語および音楽の教科書にも取り入れられた。（小学館発行「日本歴史大辞典」）

その頃銅像にされたのであろう。

# 目次

---

まえがき

- 第一章 私の受けた軍国主義教育
  - 第二章 宗教の名で人殺しが許されるのか
  - 第三章 日本の植民地政策
  - 第四章 軍歌にみる「侵略の事実」
  - 第五章 欧米諸国の植民地争奪戦
  - 第六章 戦後処理の見直し
  - 第七章 旧宗主国の責任を果たす
  - 第八章 グローバルで格差をなくす
  - 第九章 テロリスト捕らえてみれば自国民
  - 第十章 人種問題を超えて
  - 第十一章 黒衣（くろご）に徹する
  - 第十二章 日本は世界の民生向上に役立つ
- あとがき

## 第一章 私の受けた軍国主義教育

---

私は1932年（昭和7年）3月生まれだが、その前年に満州事変（日中戦争）が始まっていたので、生まれたときすでに戦時下であり、当時は徴兵制度が実施されていた。私は1938年（昭和13年）に小学校に入学して軍国主義の教育を受け始めた。軍国主義の教育は一言でいえば、男子は皆兵隊になるための教育である。

早や生まれの私は4月生まれの同級生と一年近いハンデキャップがあり、チビで細くて運動が苦手というのでは、強さを求める軍国主義教育についてゆくのは大変だった。

小学校1年から3年までは男女共学で、隣の席はいつも女子であった。4年から6年までは男子組と女子組に分かれていた。正規の授業の中に、柔道と剣道があり、4年生の夏には海国日本の男子は全員泳げるようになれと、強制的にプールに投げ込まれた。当時私は泳げなかったので、順番がくるまで恐怖でふるえていた。いよいよ自分の番となり、先生にプールに投げ込まれたが、アップアップするばかりで、沈没寸前に泳げる同級生に助けもらった。

運動嫌いの私が学校で一番いやだったのが運動会であり、徒競走であった。いつもビリ争いであった。何年生の時か忘れたが、生きている蛙を解剖する授業があった。私は蛙がかわいそうであり、怖くもあって、メスを入れることができなかった。臆病者とか弱虫と呼ばれた。蛙さえ殺せない私に人を殺す戦争などできないと思った。

日本歴史はいわゆる皇国史観を習った。万世一系の天皇をいただく由緒ある国体で、他国とは違う優秀性を強調された。

### #皇国史観

アジア太平洋戦争期にいわば国教化した天皇中心の超国家主義的日本史観。「万世一系」の「国体」とそれを基軸として展開してきたとみる日本歴史の優越性を強調し、「大東亜共栄圏」思想に歴史的裏づけを与えようとした。皇国史観は非科学的であるのみならず、独善的な自国中心の歴史観で、天皇制と帝国主義を支えるイデオロギーであった。敗戦に伴い皇国史観はその存在理由を失うと共に、日本歴史の科学的研究の進展で急速に消滅に向かう。（小学館 日本歴史大辞典）

1941年私が小学4年のときに、太平洋戦争が始まった。すでに日中戦争が泥沼化しており、その上アメリカ・イギリスと戦争を始めたのだから、大人たちは大変なことになった、と言っていた。ますますものが欠乏し、食べるものも少なくなっていた。さつまいものつるをゆでて食べたりしていたが、ある時芋の方はどうしたと聞いたら、「兵隊

さんが食べているんでしょ」といわれた。育ち盛りに食べ物が無いのは辛かった。

1944年（昭和19年）小学校を卒業し、旧制の中学校に入学した。学校には校長より偉い配属将校という軍人がいて威張っていた。軍事教練の授業があり、学校には兵器庫があった。他の授業のときでも、非常呼集（ひじょうこしゅう）がかかり、生徒は大急ぎでゲートルを巻いて校庭に整列させられた。整列が一番遅かったクラスは連帯責任ということで、教官から全員ビンタ・平手打ちを食らうのであった。私は動作が遅かったので、クラス全員に迷惑をかけたことがあった。

敵性語ということで英語が禁じられ、野球の「セーフ」は「よし」、「アウト」は「だめ」といわれていた。しかし英語の授業はあり、「A bird can fly.」を生徒の誰かが「鳥はフライにできる」と答えて大笑いとなった。卒業後の同期会でその話が出ると盛り上がるのであった。

中学1年の夏、富士の裾野で軍事教練の合宿があった。1週間だったか、10日間だったか忘れたが、7～8人1部屋であった。最初は親元を離れた解放感があったが、淋しさが増していった。なによりもかゆくて眠れないのがつらかった。当時東京にはいなかった南京虫の仕業であった。生まれて初めての経験で、殺虫剤を部屋じゅう真っ白になるほど撒いたところ、皆のどをやられ、声が出なくなったのを覚えている。昼間は匍匐前進（ほふくぜんしん）や行軍（こうぐん）などの軍事教練をうけたが、夜は交代で不寝番があった。2人1組で構内を巡視したり、兵舎の出入り口に立哨するのだが、富士の裾野は真っ暗で怖かったことを覚えている。

1945年（昭和20年）3月10日、アメリカ軍の東京大空襲により、母校校舎全焼という惨事があった。東京は下町を中心に焼野原となり、一夜に10万人が亡くなった。ちょうど学年末試験の時期であったので、私は当時住んでいた代々木練兵場（今の代々木公園）の近くから、芝公園の学校まで歩いて行った。電車もバスも走っていないので、1時間以上かかったと思うが、学校は焼かれていて、まだ煙がでており、焼けた異臭が立ち込めていた。ただ茫然と眺めていた。その後の空襲で、我が家も焼かれ、住むところがないので、母のさとの山形県に疎開した。

山形県の中学に転校したが、戦争はまだ終わっていなかった。授業を受けた記憶はあまりなくて、ガソリン代わりに飛行機に使う松根油確保のための松の根っこ掘りに動員された。

1945年8月15日天皇の玉音放送で敗戦を知った。私は中学2年だった。戦争に負けたのは悔しかったが、同時に、もうこれからは空から爆弾が降ってくることも、うちを焼かれることもない、まして戦地に行かされることもないと思うと嬉しかった。東京は焼野原で、住む家がなかったので、すぐ帰ることはできず、しばらくは敗戦後の社会情勢

をみるしかなかった。戦争に負けたのは初めてなので、敗戦後世の中がどうなるのか誰もわからなかったのである。

その後父の友人の好意で家族全員東京に帰り、私は元の中学に復学したが、その時に同級生の惨事を聞いた。戦争は終わっても焼かれた学校は帰ってこない。校舎全焼後、焼け残った他の学校校舎を借りて授業を行っていたが、母校校舎の焼け跡の整理中に不発弾が爆発して、級友2名死亡、数名大やけどという大惨事が起こったことを聞いたのである。戦争が終わって数か月後のことである。

私は軍国主義教育を受けて、教育の怖さを知った。「日本は神の国だから、神風が吹いて戦争に勝つ」と信じ込んでいたのである。小学校6年間と中学1年数か月間の教育が染みついていたのである。若いときの教育は本人の人生に大きな影響を与えるだけでなく、国としても間違った方向に行く可能性がある。

自爆テロの実行者がどういう教育を受けてきたのかわからない。そもそも教育を受ける機会があったのかも知らない。日本の援助でできた学校が戦争で破壊されたとの報道に接し、悲しくなったことがある。ノーベル平和賞受賞のパキスタンの少女マラさんは「すべてのこどもが教育を受けられるように」と語ったと伝えられた。彼女の学校は破壊されたとのことである。世界には教育を受けられない国があり、文字の読めない人がいる。少年兵の存在もしられている。少年兵たちは基礎教育を受けたのだろうか。まず世界のどの地域でも、子供たちが基礎教育を受けられるようにすることが大人の責任である。

## 第二章 宗教の名で人殺しが許されるのか

---

人類の歴史の中で、宗教戦争のなかった時代はなかった。宗教は「人間の生命と魂を救うためにある」と聞いている。宗教の名で人殺しが許されるとは思わない。人を殺してもよいと教義にある宗教があるとは思えない。それではなぜ宗教戦争が絶えないのか。

我が家は仏教の浄土真宗なので、ユダヤ教・キリスト教・イスラム教についてはほとんど何も知らない。特にイスラム教については無知である。今回この本を書くにあたって、イスラム教の歴史を生まれて初めて勉強したのだから、その知識のほどは頼りないものである。

日経ナショナルジオグラフィック社の「ビジュアル大世界史」によれば、「今日、イスラム教は西側の多くの国々で、かつてないほどメディアによく取り上げられているが、その信仰や文化についての情報は限られている。イスラム過激派によるテロリズムは、2001年9月11日最高潮に達したが、それ以来西側では現実の脅威と受け止められている。このような政治状況があるため、イスラム過激派と主流派の違いが明確に示されず、イスラム教、ユダヤ教、キリスト教に共通点があることも、イスラム文明に豊かな知的、文化的歴史があることも見過ごされている。」とある。

イスラム教について知らないのは私だけではなく、みんな知らなかったのだということが分かった。テロが怖いというだけではなく、イスラムの人たちがどういう歴史を歩み、今どういう環境にあり、今どう思っているのかを知ることが大事だと思った。

同大世界史によれば、イスラム教は預言者ムハンマドが622年メッカからメディナへの聖遷を行なったこの日をイスラム暦の始まりとしている。632年ムハンマドの死去の前に、後継者を決めていなかったために、後継者争いが生じ、それぞれ正当性を主張したため、同じイスラム教の中に争いが持ち込まれて現代につながっているようである。

後継者を決めておかないと、あとでごたごたが起きる恐れがあるのは、宗教に限らず、どこの組織にもあることで、珍しいことではないし、解決不能ということでもない。関係者が武力にたよらず話し合って決めればよいのである。例えば仏教でもいろいろな宗派があるが、なんとか平和的に住みわけしているようにみえる。「宗論はどちら負けても釈迦の恥」という言葉を寄席で聞いたように思う。落語には宗教をテーマとしたはなしがあり、その枕として聞いた。宗論は宗教をテーマとした議論だから、殺し合いではない。人殺しはしない、人殺しはよくないことと決めている以上、平和的に話し合って、共存の方法を追及すれば、必ず解決できると思うがどうだろうか。1000年以上殺し合いを続けているのだから、もうそろそろ気づいてもいいのではないか。



「イスラム圏に西側を敵視する潮流が生まれたのは、長い植民地時代に受けた屈辱も一因であるが、植民地時代後の中近東で、西側が独裁政権を支援したことも関係している。（ビジュアル大世界史）」

11世紀に始まったキリスト教徒による十字軍活動がイスラム教徒との争いの発端ともいわれるが、長い間欧米列強がアジア・中近東・アフリカを植民地として搾取してきたことは歴史的事実である。植民地時代後の中近東や中南米で、欧米列強が自国の利益のために、独裁政権を支援したことも事実である。

キリスト教の総本山バチカンの法王庁が仲介して、長年にわたって断絶していたアメリカとキューバが国交を回復すると伝えられた。南米出身のローマ法王が熱心に勧めたという。平和を推進するのも宗教の役割なのであろう。

フランスの出版社がイスラム教の創始者を風刺したということで、編集会議の席上テロに会い、編集者と画家が殺されるという事件があった。表現の自由と名誉棄損の件で議論があった。出版物の内容がイスラム教過激派の名誉を傷つけたといわれる。私はこの件でこう思った。

いきなり暴力に訴えたのは悪いと思う。名誉を傷つけられたと思ったら、国連の機関なり、国際司法裁判所なりに提訴するのが現代のやり方である。しかし表現の自由は、他人の名誉を棄損しない範囲で許されるべきという議論もある。これは難しい議論である。

私はこう思っている。他人が自分の生命よりも大切に思っていることを風刺したり、おちょくったりすることは私はやらない。いろいろな考えの人がいることを認めるのが民主主義である。「死者は生者をわずらわさず、生者は死者をむちうたず」という文化で育った私は、死者を風刺するのは、死者は反論できないのだから、平等とはいえない、と思っている。

いずれにしても、いきなり暴力に訴え、他者を巻き込むのはよくない。

自爆テロの原因を考えてきたが、こうしてみると、根が深いことが察せられる。植民地時代に遡るとすれば、日本も植民地を持っていた歴史がある。

次の章では日本が植民地に対してどのような対応をしてきたかを考えたい。

長い間の鎖国をやめ、海外諸国とのおつきあいを始めた明治政府は、当時のアジアの状態にびっくりすると同時に脅威を感じた。タイと日本以外はほとんど欧米列強の植民地にされていたのである。明治政府は欧米の制度に直接学ぶと共に、欧米列強の植民地にされないために富国強兵を国是（こくぜ：国の基本方針）とした。当時まで欧米列強はアジア・中近東・中南米・アフリカにおいて、植民地争奪戦を繰り広げていたのである。幸い日本は植民地にされなかったが、日清戦争（1894-95）、日露戦争（1904-05）に勝ったことから、台湾・朝鮮・南樺太等を植民地とした。私は、台湾・朝鮮・南樺太が日本領に編入され、日本本土と同じ色で表示された地図を覚えている。日本は欧米列強の植民地にされることは免れたが、植民地を持つ国となり、それぞれの国の人たちに多大な迷惑をかけたのである。

日本が植民地にとった政策には、皇民化政策があった。当時の日本は天皇が元首であり、我々国民は、天皇の民ということで、皇民といわれていた。植民地の人たちも日本人と同じように、天皇の民として公平に扱うと聞かされていた。

#### # 皇民化政策（こうみんかせいさく）

朝鮮・台湾・中国・東南アジアなどで大日本帝国が占領地とった同化政策。特に朝鮮では朝鮮人を戦時動員体制に組み込むための一連の政策として施策された。朝鮮人の民族性を抹殺し、「亜日本人」化することにあり、日中戦争以降はさらに強化され、完全に皇国臣民化させる「内鮮一体（ないせんいつたい）」が提唱された。（中略）神社参拝が強制され、皇国臣民の誓詞が制定され、毎朝学校や職場や家庭でも斉唱を強要された。朝鮮語を正課からなくし、日本と同じ教科書を使い、日本語の常用を強要した。姓名を日本式に変え、徴兵制度も適用された。生活の細部まで皇民化が図られ、相互に監視させられた。（小学館発行 日本歴史大辞典より）

日本がどこかの国の植民地にされ、日本語の使用を禁止され、苗字も変えて、他国の神様を毎日拝めといわれ、どこかの国の徴兵制度に組み込まれたら、弱虫の私でも反発し、抵抗しようという気になるだろう。末代までもその口惜しさを伝えるだろう。日本は軍事力を背景に、植民地化した近隣諸国に強要してきたのである。日本国民はいつの世になっても、この事実を忘れてはならない。

最近、戦争を知らない世代の国会議員が「八紘一宇（はっこういちう）」という言葉で「すべての国が一つの家のようになる」といったと伝えられた。私の記憶では、意味

はその通りであっても、「軍事力をもって、日本を家長とする一家」というように教育を受けた。「すべての国が一つの家のようになる」という目的は良いとしても、「軍事力をもって」という点で戦争を引き起こし、「日本を家長とする」という点で他国の賛成を得られなかった。「八紘一宇」と聞くだけで、私には拒絶感がおこる。多分「八紘一宇」と言った議員は誰かに言わされたのであろう。

当時「大東亜共栄圏」という言葉も政府から宣伝され、東アジアが共に栄えるのは良いことと思わされたが、実際には「軍事力をもって」と「日本をリーダーとする」という真意が隠されていたのを後で知った。当時の政府の方針を、マスコミはそのまま垂れ流し、役人は政府の意向を先読みして国民にあたり、日本中が異を唱えることができず、結局310万人もの日本人が死ぬという悲惨な結果を招いたのである。

「積極的平和主義」、「核の平和利用」、「原発は安全」、「集団的自衛権」などという、耳あたりのよい言葉の裏に潜む、真の意向を国民として確かめる必要があることを学んだ。

## 第四章 軍歌にみる「侵略の事実」

日本は前章のように、近隣諸国を植民地にしてそれぞれの国民に多大の迷惑をかけた過去がある。これは何年経っても忘れてはならないことである。植民地ではなくとも、他の国や日本以外の場所を戦場にした過去もある。戦場にされたらどんなひどい目にあうか、沖縄の人たちはよくわかっている。私も東京大空襲でうちと学校を焼かれ、その惨状は経験している。

「侵略の明確な定義はない」といった政治家がいる。国連憲章には、「侵略とは国家が他国の主権、領土保全もしくは政治的独立に対してなす武力行使、または国連憲章と両立しない他の武力行使である。」とあり、「侵略となりうる行為は、①兵力による他国領域への侵入もしくは攻撃、またはその結果生じる軍事占領もしくは武力行使による他国領域の併合、②兵力による他国領域に対する爆撃または武器の使用、③兵力による他国の港または沿岸の封鎖、④兵力による他国の陸海空軍または船隊もしくは航空機隊に対する攻撃——など7項目定義している。（ブリタニカ国際大百科事典による）」

私のウロ覚えの軍歌の中にも、いくつかの外国の地名が出てくる。外国の地で武力をふるって領地を奪うのは侵略である。戦場にされた現地の人々は侵略の被害者である。いつまでも恨みに思うに違いない。

私の知っている軍歌をいくつか紹介してみよう。

### 戦友

1 ここはお国を何百里 離れて遠き満州の  
赤い夕陽に照らされて 友は野末の石の下

満州（まんしゅう）は現在の中国東北部である。一里は約4キロメートルである。日本の地を何百里も離れて遠い中国の地で戦争をしていたのである。この歌は14番まであり、戦死した戦友の最後を戦友の親に知らせる手紙である。

### 広瀬中佐

3 今とはボートにうつれる中佐 飛びくる弾丸（たま）に忽ち失せて  
旅順港外恨みぞ深し 軍神広瀬とその名残れど

旅順港は中国東北部にある。広瀬中佐は日露戦争で戦死し、軍神第1号になった海軍軍人である。文部省唱歌「広瀬中佐」がつくられ、小学校で習ったことがある。

### 麦と兵隊

1 徐州（じょしゅう）徐州と人馬は進む 徐州いよいか住みよいか

しゃれた文句に振り返りゃ おくになまりのおけさ節  
ひげがほほ笑む麦畑

徐州は現在の中国の地名であり、海からかなり離れたところである。そんなところまで旧日本軍は進撃していたのである。

轟 沈（ごうちん）

3 轟沈轟沈 凱華（がいか）があがりゃ つもる苦労も苦労にやならぬ  
うれし涙で潜望鏡も くもる夕陽の くもる夕陽のインド洋

潜水艦で敵艦を撃沈したときの歌である。着弾後1分以内で船が沈むのを轟沈といった。インド洋は公海かもしれないが、敵艦を攻撃すれば侵略行為であろう。沈めた方はうれし涙かもしれないが、沈められた方は悲惨であったろう。

上海だより

1 拝啓 ご無沙汰しましたが 僕はますます元気です  
上陸以来今日までの 鉄のかぶとのたまのあと  
自慢じゃないが見せたいね

現在の中国の上海から、日本の母親にあてた手紙の形をとっている。鉄かぶとのたまのあとからみても、危険な目に何回もあってきたことが察せられる。

ラバウル小唄

1 さらばラバウルよ またくるまでは  
しばし別れの涙がにじむ 恋しなつかし島々みれば  
椰子の葉陰に十字星

この歌は太平洋戦争が敗色濃厚となり、南太平洋の拠点ラバウルを放棄して転進（退却）したときのものだろう。ラバウルは東洋一の航空基地といわれたが、基地があれば真っ先に狙われるのはいつの時代でもいえることである。

私が今でも歌える軍歌を思い出してみても、旧日本軍が侵略行為をしていたことは明らかである。

戦争についてラジオ放送する場合、戦果が上がった時は「軍艦マーチ」から始まり、「大本営発表 何日何時どこどこにおいて敵と遭遇、戦艦何隻、駆逐艦何隻撃沈、わが

方の損害軽微なり」という発表があったが、戦況が悪くなるにつれ、「軍艦マーチ」ではなく「海ゆかば」からはじまるのであった。「海ゆかばみずく屍（かばね） 山ゆかば草むす屍 おおきみの辺にこそ死なめ かえりみはせじ」という古歌から出たもので、天皇（おおきみ）のそばで死ぬことを後悔しないという意であろう。今でこそいえるが、誰かのために死ぬのはやめた方がよい。

日本の植民地政策と侵略の実態をみてきたが、もしも日本が逆に植民地にされたり、侵略されたりしていたら、70年たったからといって相手を許せるだろうか、と思うようになった。私はアメリカ軍の東京大空襲により、空から爆弾が降ってくる恐怖、家を焼かれた恨みは70年たっても忘れない。加害者は忘れても、被害者は永久に忘れないものだと思っている。

そうすると、自爆テロの実行者は、欧米諸国による長年の植民地政策の被害者として、その屈辱を忘れないでいるのかもしれない、と思った。アジアでは日本とタイ以外は、長い間欧米諸国の植民地にされていた歴史がある。私の知っている地図でも、中国は香港・マカオのほか沿岸部はほとんど欧米諸国のものであったし、フィリピンはアメリカ、インドネシアはオランダ、ラオス・カンボジア・ヴェトナムはフランス、マレーシア・シンガポール・インド・ビルマ（今のミャンマー）はイギリスの植民地であった。

アフリカや中近東も、欧米諸国の帝国主義の犠牲者として、植民地にされていたが、どの辺がどこの国の植民地であったのか覚えていない。

奴隷貿易の被害者でもあったアフリカの人たちは、売買の対象とされた屈辱を今も忘れないのかもしれない。アメリカの作曲家フォスターは「オールド ブラック ジョー」という名曲を残しているが、この曲はアフリカから連れてこられた黒人をテーマとしている、と聞いている。

日本が植民地としていた地域の人々にかけての過去の迷惑を忘れてはならないと同時に、欧米諸国もそれぞれ自国の植民地として迷惑をかけていたことを忘れてはならない、と思う。

安倍首相は戦後レジーム（枠組み）の見直しが必要といているが、第二次大戦の戦後処理をグローバルで見直す必要がある。特に国連で行うことがテロの防止につながると思う。日本は敗者であったから、大戦後の世界をどうするかという戦後処理について、関わることはできなかった。五か国の戦勝国アメリカ・イギリス・フランス・ソ連・中国が中心となって戦後処理がおこなわれたが、それぞれ国益を優先したために、相当な無理な処置がとられた。例えば、ドイツや朝鮮のように、同じ民族でありながら分断されるという悲劇があった。また中東やアフリカのように、その後の地域情勢が不安定になるような措置もとられた。長年にわたる戦争で、各国ともへとへとであったから、戦勝国といえどもじっくり考える余裕はなかったと推察される。

戦後すぐに戦争の反省から、国際連合が発足したが、戦勝国の都合のよいようにシステムがつけられたため、戦後70年たっても、安全保障理事会で前述の5か国だけが拒否権をもつという状態が続いている。戦後独立して国連に加盟した国が多いのに、そのシステムはもとのままである。一国一票という民主主義運営にはなっていないのである。これでは不満も出る。

それに加えて、先進国の軍事力を背景にした「上から目線」のいつもの対応には、途上国はうんざりしているだろう。この辺に、テロ防止の鍵があるかもしれない。前述の5か国がテロを真底からやめさせたいと思うのなら、軍事力の増強よりも、国連を真に民主化することである。それには自ら安全保障理事会で拒否権を放棄することである。1か国だけで難しければ、5か国のどこかが他の4か国と相談することである。

国連憲章第一条には、国連の目的として、「国際の平和及び安全を維持すること」「諸国間の友好関係を発展させること」「経済的、社会的、文化的、人道的な問題の解決のため国際協力すること」をあげている。（ブリタニカ国際大百科事典）

テロは正に平和と安全を脅かすことである。諸国間の友好関係を傷つけることである。拒否権をもつ5か国の中から、拒否権返上の提案があれば、国際社会にとって、地球全体にとって、大きなインパクトがあるだろう。無駄な軍備拡張競争を続けるよりも、テロ防止にはるかに効果があるに違いない。

日本は外交努力によって、こういう雰囲気作りに役立つことである。民主主義を他国に勧めるのなら、まず国連から民主的な運営を行うのが筋というものである。戦後70年もたっているのに、先の大戦を引きずっているのは国連であり、大戦の勝敗に関係な



いその後の加盟国からみれば、そろそろ国連改革の時期がきているということだろう。

## 第七章 旧宗主国の責任を果たす

---

植民地をもっていた国を宗主国（そうしゅこく）といった。前述のごとく、欧米諸国はアジア・中近東・アフリカ・中南米に植民地をもっていた。旧植民地だった地域は独立後も概して貧しく、生活水準は旧宗主国よりも低いところが多い。経済格差がある。格差もテロの一因である。

北半球の繁栄に比べれば、南半球は貧しい国が多い。南北格差といわれる。旧宗主国は北半球に多く、南半球にはその植民地にされた国が多い。旧宗主国は長い間植民地を搾取して繁栄につなげたところがある。独立後も宗主国との間で、不平等条約を結ばされたところもある。

南北格差解消ないしは軽減のために、旧宗主国はかつての植民地の経済自立と民生向上の支援を行う責任があるという決議を国連で行うのである。旧宗主国は長年の間、植民地を搾取して、いい思いをしてきたのであるから、その責任をとり、旧植民地の生活水準が向上して、旧宗主国と肩を並べるまで支援するのである。旧宗主国がすべてこの支援を行えば、南北格差は解消ないしは軽減し、テロも少なくなるに違いない。

フランスの経済学者ピケティ氏の労作「21世紀の資本」が全世界で評判になっている、と報じられた。150年前まで遡って、各国の税制を調べ、資本主義は経済格差を広げるので、累進税制を取り入れるようにとの勧めを行なっているとのことである。

私は戦後のもののない時代に育ったので、経済的にもう少し豊かになりたいと思い、大学は経済学科にはいった。当時はマルクス経済学全盛の時代で、資本主義経済は将来経済格差により破綻すると習った気がする。その後ケインズ経済学を習って、結局経済学は実体経済の後追いしかできない、という感想をもった。学問というのは、これからの社会の進む道筋を示すものと思っていたので、がっかりしたのを昨日のように覚えている。

ピケティ氏は学者であり研究者であるから、150年のデータに基いて発表されたが、資本主義は格差を広げると、半世紀以上も前に大学で習ったと思う。その後、ソ連の崩壊で、社会主義の方が資本主義より先に参ってしまったように見えた。

資本主義は自由経済が基本であるから、人間のよい暮らしをしたいという欲に直結する。つまりパイ自体を大きくするには、資本主義経済の方が人間の本性に合っていたようだ。社会主義はパイを平等に分けるという点では優れているのかもしれないが、努力してもしないでも同じ報酬となると、さぼる人間がふえる、これも残念だが人間の本性である。これまではパイ自体を大きくする経済成長に重きをおいてきたが、自由にやれば格差が広がることはとっくに分かっていたことである。また自由経済ではエネルギー資源が枯渇し、環境も破壊されやすいことが分かってきた。

最近アメリカとキューバが長年の国交断絶を超えて、交流を再開することになった、と報じられた。アメリカは資本主義国、キューバは社会主義国である。資本主義は人間の本性である欲を刺激して経済成長を進めるが、経済格差を広げる欠点がある。社会主義は格差を是正し、平等を進めるにはよいが、経済活動にいろいろと制約がともなう。資本主義も、社会主義も、両方とも長所と短所を備えていることが分かってきた。資本主義国も社会主義国も、短所があまり実体経済にあらわれないように、国民の生活を苦しめないように経済運営しなければならない。

経済格差があまりにもひどくなると、社会は不安定になる。テロの可能性が出てくる。長い間植民地として搾取され、独立後は旧宗主国の都合で人民を苦しめる独裁政権を支援され、現在は経済格差と貧困に苦しまされている、との思いが強くなるのであろう。これでは若い人たちは希望をもつことができないだろうと察しはつく。

テロの背景や原因は深いのである。日本も含めた先進国の側に責任がないとはいえ

ないし、軍事力の強化・警備力の充実だけではテロをなくすことは難しい。南北の経済格差、一国の中の経済格差を軽減することがテロ防止につながるのである。

イスラム国には他国民・他民族が大勢参加していると報じられている。日本の大学生も参加しようとしたという。欧米諸国からもかなりの若者が参加していると報じられている。「テロリスト捕えてみれば自国民」という心配が単なる杞憂に終らなくなっている。

イスラム国へのルートに乗せないために、警備を強化しても、間接的なルート経由の若者を全員防ぐことは難しい。

また直接イスラム国を攻撃するための軍事力を強化しても軍事力だけでは根絶は難しい。

自国の若者たちに、自国で生きてゆく希望をもたせることが本筋である。富裕者・大企業優先の政治では、その恩恵が一般の若者たちに及ぶまで時間がかかりすぎる。恩恵が及ばないことの方が多い。実際の経済界が必要としている以上に金融を緩和すれば、余ったかねは株式購入に向かうかもしれないが、それによる株高は企業実績を反映しない恐れがある。いつかはバブル崩壊という、いつか来た道に戻ることも考えられる。

だいたい株式投資は一般の若者たちにとって身近なことではないだろう。株が上がって儲かったという思いとは無縁の人が多し。株式投資の種銭つくりのために、まず働いて稼ぐのが普通だろうし、稼いだ金は自分の使いたいように使うのが今流であろう。

若者たちに、軍隊以外に食べてゆく道を閉ざしては、健全な社会とはいえない。若者たちを戦争に駆り立てるのは、まともな政治とはいえない。自国民をイスラム国に向かわせないためには、貧困の解消と格差是正が必要である。政治がごく一部の利益代表に成り下がったとき、国民大衆は失望し、生きる希望をなくすのである。

最後は人種問題である。アメリカ合衆国で、黒人を撃った白人警官が無罪になったことに抗議した黒人群衆の行動が伝えられた。多民族国家のアメリカで、現実には人種問題があることをうかがわせた。肌の色と関係なく、人はすべて平等というのが、現代の国際的な常識である。

一方が軍事力を背景に、上からの目線で見くたせば、見くたされたほうは面白くないだろうし、それが長く続けば恨みとなり、いつか一泡ふかしてやろうという気持ちになるかもしれない。

人種問題を克服できるかどうかは、人類に課せられた課題のひとつである。アメリカ合衆国の大統領にオバマ氏が就任したとき、さらにオバマ氏がノーベル平和賞に輝いたとき、人種問題克服の期待、平和への期待があった。オバマ氏の大統領の任期中に、人種問題克服とノーベル平和賞にふさわしい実績を残すことを期待したい。

テロは人種間の問題とは思いたくない。人類はもっともっと賢いと思う。テロは自己の主張の表現であろうが、無縁の他人を巻き添えにする。自他ともに生きることが、この世に生を受けたものの務めであり、どの宗教もそのように教えていると思う。

これからの国際社会における日本の生き方について提案したい。

覇権を目指さず、主役は他国たとえばアメリカ・中国にゆずり、日本は歌舞伎でいえば黒衣（くろご）に徹する生き方である。

### # 黒衣（くろご） （ブリタニカ国際大百科事典）

歌舞伎の舞台進行、演技の介添えをする役。黒の着物に黒い頭巾で顔を隠している。この名がある。舞台上で不要となった小道具をかたづけ、俳優に台詞（せりふ）をつけること、小道具を手渡すこと、衣装の着脱の手伝いなど、俳優について舞台上で目立たぬよう、手際よく進行を助ける。

第二次世界大戦までは、日本は軍事力を増強し、アジアの盟主となることを目指していたが、アジア諸国を戦場として多大の迷惑をかけ、結局敗戦に終わった。戦後70年、軍拡競争に巻き込まれず、戦争にも無縁で、ひたすら民生の向上に専念してきた。

さて、世界の現状は中国が台頭して、アメリカと競うようになってきている。日本はこの両大国の間でどう生きるかという切実な問題を抱えているが、戦前のように「戦争のできる国」に逆戻りして、せっせと軍備増強にはげめば、近隣諸国に不安を与え、緊張を増すばかりである。

東西冷戦終了後、アメリカは世界のリーダーとして、警察官として、誇りをもってきた。日本の安全保障は日米同盟を基軸にしているから、アメリカを頼りに思うのは当然かもしれないが、なにもかもアメリカの意向通りという時期は過ぎたように思われる。アメリカに占領されていた時期はとっくに過ぎており、中国の台頭など国際情勢も、時代の常識も変わってきている。

アメリカのドルは今でも基軸通貨であるが、その地位と影響力は一時ほどではないと思う。中国がアジア投資銀行を提案し、アメリカと日本以外の有力国は参加表明しているところが多いと報じられている。アジアのインフラ整備は十分とはいえず、まだまだお金が必要である。日本が15年戦争で散々ご迷惑をかけた中国が元気になるのはうれしいことである。人民元がドルに代わって基軸通貨になる可能性がないとはいえない。中国が国際社会の中で羽ばたけば、国際社会のルールや常識を学ぶことにもなる。

アメリカに対して、同盟国として、友情をもって進言する時期がきているのかもしれない。日本が集団的自衛権を行使して協力するよりも、長い目でみれば、平和であることはアメリカの国益にかなうことである。テロを防止するには、自国を含めて世界中か

ら貧困と格差をなくすためにアメリカが行動を起こすことである。テロをなくすには、軍事力を背景に、上からの目線で世界を見ることをやめることである。

日本は黒衣（くろご）に徹して、国際舞台の脚光を浴びないように、目立たないように振る舞うことである。日本は国連平和舞台の黒衣（くろご）に徹するのである。



日本は軍事力によらず、経済力と技術力によって、世界の人々の生活水準をあげることに役立つ。人間が生きてゆくのに最も基本的な衣食住の分野、教育分野、医療衛生分野、文化的な分野で、世界の人々の役に立つことを支援する。それぞれの国で、こういう分野の仕事が増えれば、国としても個人としても、経済的に自立できるし、若者が将来に希望をもって生きられるようになる。若者や子供が将来に希望を持てるようになれば、テロも減るに違いない。

空気を清く保つ、井戸掘りなどきれいな水を身近に、森林を増やす、耕地をふやす、学校を建てる、病院を建てる、アニメやカラオケなど、日本の得意分野で世界の民生の向上に役立つ、これがこれからの日本の進むべき道である。自分・自国が他の人・他の国の役に立つのはうれしいものである。生きがいが生まれる。寛容の気持ちが生まれ、他人に対し、自然に対し、謙虚になる。他人とともに、自然とともに生きることによるこびを感じるようになる。こうなればテロなど誰も考えなくなる。

前著 戦争は怖い！ を電子書籍で世に問うたのは昨年（2014）であったが、その後無差別のテロが世界中で何回か起こった。関係のない無実の人を巻き込む残虐な行いに、怒りを感じる人が多い。

「テロをなくす」と題して、いろいろな角度から検討したが、この対策を全部やったら確実にテロはなくなるとも言い切れない。国対国の従来の戦争と違って、見えない相手に備えるのだから、非常に難しい。

私はテロの実行者の気持ちになって考えてみた。長い間、上からの目線で見下げられ、屈辱の中におり、現在もひどい格差があり、貧困で将来の希望がもてないという状況にいるとき、誘われると乗りやすい。

要は若者や子どもたちに、生きる希望をもたせることである。日本がそのために役に立つことである。

「日本の選択」を従来の出版印刷物として発行し、ついで電子書籍として「戦争は怖い！」、そして今回同じ電子書籍として「テロをなくす」を公開した。この三部作は、私の空襲体験・戦争体験から、次世代の人々へのメッセージである。戦争は嫌だ、平和がいい、これが一生かけて学んだことである。